# 「マルタ島のユダヤ人」試論

## →―主人公バラバスの変貌→夕島 のユ タ キ 人」記論

問 題 点

岡

田

洋

幕と条件つきで五幕に限るのが賢明だとしているし、F・P・ウイルソンも「初めの二幕を書いたと同じ人間が の性質がまことに説明し難いからである。批評家達により種々な解釈がこの謎を解こうとして試みられてきた。 もおそらく最上と思われるシーンで幕をあげ、一幕二幕では高い悲劇的緊張を保ちながら、三幕四幕ではメロド は「ハムレット」とはまた異った意味においてではあるが、謎の芝居である。すなわちマーロウが書いたうちで これがマーロウのものであるかどうかさえ疑わしい。 て全部書いたのかという問題である。現在残っているテキストは一六三三年に出版された四折版 ただ 一 つであ ラマに堕し、五幕の最後でやや開幕の輝かしさを取り戻すものの、も早幕を下ろさねばならぬ、といったこの劇 第一に考えられるのはマーロウ以外の作者が執筆に加わったのではないか、またマーロウが書いたとして果し 「エリザベス朝の芝居のうちで、もっともむつかしいものの一つ」とブラッドブルックがいっているこの芝居 マーロウの死んだのが一五九三年であるから死後四十年を経ての出版である。極端ないい方をすれば、大体 エリス・ファーモアはマーロウのオーサァシップを一幕二

\_

「マルタ島のユダヤ人」試論

「マルタ島のユダヤ人」試論

後の三幕全てに責任があると考えるのは感覚と感受性にとってはうけつけられぬ」と述べている。 歪みを、後代の手によるインタァポレイションだとして除いてしまう安易な道よりも、それらに注意しながら、 をはるかに多く見出したことを確認した上で、そうかといって、筋のつながりにおそらく終始マーロウがあずか っていたということを否定するのは正しくないであろう」といっている。そしてレヴインは「いろいろな矛盾や ッカァブルックは「推敲者が、 『フォースタス博士』の場合と同様、芝居の前半よりも後半に改訂と加筆の機会 しかし一方タ

『マルタ島のユダヤ人』を一つの芸術的完成体としてうけ入れる方が、より賢明で、そして間違いなくより実り

が多いように思われる」と主張するのである。 当にせかされて後の部分は大ざっぱなスケッチしかできていなかったのだとか、不慮の死にあって書きかけのま まになったのだとかいう説である。 すなわち彼は始めの二幕を書きあげた後、 ところでタッカァブルック、レヴインのいう如く、この作品をマーロウの筆になる芸術的なユニテイをもった その不均一性をどのように解釈すべきであろうか。まず始めに何らかの外部的原因が考えられる。 あるいはそういうことがあるかもしれない。 急用ができて残りは下書きだけを書いておいたのだとか、 しかし何らかの内部的原因が考 劇場から不

のドラマ ⇁ I п マキアヴ ウが序詞において明らかにしている如く、 エリ的悲劇」だとし、 「深刻な人間性はいわば偶然のインスピレイションでは入ってきた それ自身の法則によって支配されているユニイクな形式 最初の意図が偉大な悲劇を書くことにあったと決めた上でいろいろな推測を試みているのだが、

批評家のなかに

マ Ī

ウの

ウの最初の意図がメロドラマを書くことにあったと主張する人がいる。タッカァブルックはこの芝居

る。だが何故彼は厭にならねばならなかったのか説明のつけようがない。ところで多くの批評家は、

ある人は、マーロウは最初の数シーンを書いた後厭になって興味を失くしたのだと考え

えられぬであろうか?

を

は

1

間にはある距りがある。 べてい ヤ人のこくのある味わいを愛する、まさにそのような人間」なのであった。 よう。ベネットがいう如く「『神を罵りながら死んだマーロウ』、マキアヴエリの『無神論』的弟子は、このユダ したのかもしれぬ。あるいは深刻な笑劇を意図したのかもしれぬ。だが作者の意図をそのいずれかに決めてしま 半ばを境にして笑劇となり、 劇とするならば、 最初の二幕 って書き始めたように思われるのである。 わ ととるにせよ、 は の笑劇に相応しい調子を発展させていることが判る。……これは古いイギリスの諧謔、すごく真面目で、 らば最後の幕は解ってくる。そしてもしわれわれが注意深い耳をもってその詩型に注意するなら、 の、あの想像的人間化を欠く、 る人間的情熱の深い研究を、 のである。 ねばならないのであろうか? .偶然のインスピレイションによっては入ってきたものであろうか? 喜劇的諧謔の笑劇なのだ」といっている。だが果してタッカァブルックのいうように、 は、 『マルタ島のユダヤ人』の異質的性格はもともとのものなのだ。 リオットは「もし『マルタ島のユダヤ人』 この両説に一つの共通点が見出せるであろう。すなわち、この芝居は始めは悲劇であり、二幕 マーロウが、 初めの二幕はどのように解釈すべきであろうか? しかし彼はユダヤ人のうちに、一つの悲劇性をみて、 最後にまた悲劇的調子を回復する、 かなり忠実に表わしている。……あとの三幕は……初めの幕がうけ入れ 『流血劇』たる彼の劇を、 マーロウの本来の煽情的なプロットを、不正確にではあるが表わしている」と述 私にはマーロウが、ある統一的視点に立ちながらも、 マーロウの二元性という問題が再びここに浮び上ってくるのがみられ それでもって始め、 を悲劇、 という点である。 あるいは流血悲劇としてでなく、 しかしこの作品を悲劇ととるにせよ、笑劇 またエリオットのいうように、 ……現在われわれがもっている形の 無論この芝居では作者と主人公との また聊か鍍金せんと思いつい 暖かな目を注いでいるのである。 マーロウは偉大な悲劇を意図 始めから複数の主題をも 笑劇ととるな 深刻な人間性 マーロ たところ これを笑 狂暴で ウはこ

ルタ島のユダヤ人」試論

たとえ観客がユダヤ人を嘲笑するにしろ、それはいつしか暗い笑いになるのに気づくであろう。

そのような変貌の跡をたどって一つの解釈を試みてみたいのである。 と変ってしまう。 ヒアロウとヴイレンのあいだをよろめくのではない。彼は二幕の半ばをターニングポイントとして異った人間 「フォースタス博士」では主人公がたえず神と悪魔のあいだをよろめくのがみられた。この作品では主人公は その変貌は極端である。事件の核心はこの辺にあるようだ。私はこの小論において、主人公の

### 悲

劇

る。 戦に駆り立てる天国と、フォースタスが絶望によって投げ込まれる地獄 しかしまた一つの前進でもあった。今迄内なる観念にのみ注がれていた目が、外なる現実へと開かれたからであ 越的なものから完全に切り離された世界を描いているのである。」 マダリァーガの定義の仕方を借りるならば、 はしない。『マルタ島のユダヤ人』にはそのような一つの種類の存在と他の種類のそれとの衝突はない。 に堕すことによって彼の苦しいジレンマに一つの終止符をうった。それは考え方によれば一つの逃避であった。 た絶対の探究をも早行わない。 って横に動いてゆく、水平的人物である。マーロウは、この作品において、生命、 タンバレインとフォースタスが垂直的人物であるのに対し、バラバスは、その人の緊張と関係が他の人たちに向 に述べている。 この芝居をマーロウの前の二作と較べるとき、そこに顕著な相異点が見出される。マフッドはそれを次のよう 「タンバレイン大帝」の宏大な舞台から「フォースタス博士」の小さな書斉へ連れてゆかれたわれわれは、 「最初の二つの悲劇を通じてマーロウは目にみえる以外の世界-「宗教なんて子供の頑具」(序詞一四行)なのだ。 ――の存在を決してわれわれに忘れさせ ――タンバレインの誇りが彼を挑 マーロウはフォースタスを地獄 死 運命、 神 悪魔といっ 劇は超

が外なる対立を呼び起す。 国のトルコが、 しこの閉じられた世界には、絶えず外界の気圧が侵入を企てている。すなわち、 る。 てバラバスは多くの国の富が『小さな部屋』につめこまれている彼の帳場に満足してとどまっている」 の で あ 再びここで外の世界へ出る。だがその世界は、やはり「フォースタス博士」の書斉と同じく、一つの孤立した世 ドラマは、 「『マルタ島のユダヤ人』は陸地に囲まれた地中海の一つの島をそのセッテイングとしている。 共にマルタをわがものにせんと目論んでいるのだ。外なる対立が内なる対立を、 このるつぼのような世界の内部で、バラバス対キリスト教徒の葛藤を中心に進められる。 マルタは、かくて、二つの世界の間にあって、 内に葛藤を蔵しつつ、 キリスト教国のスペインと異教 自己の安全と独 逆に内なる対立

立を守ってゆかねばならないのである。

た同時に、 対してマキアヴェリは、 主張することであった。 理論の窮極の意味は」とマリオ・プラッツはいう、 宗教の否定、 とされているマキアヴェリの登場で幕をあげる。彼がその序詞を通じて強調しているのは、人と言葉への不信、 ッドの「スペイン悲劇」がアンドリアの幽霊で始まっているように「マルタ島のユダヤ人」も世間 イタリアにおける陰謀と葛藤の過巻く関節のはずれた時世が産んだ、 力への依存である。マキアヴエリズムは紛れもなくルネサンスの産物であった。「マキアヴエリの 地上において獲ち得られ、享受された古えの力の理想を呼び出したのである。」それは 中世の禁欲的世界観は人間活動の目的を地上の生活の彼方においた。この神学的見解に 「中世の禁欲的な世界観に対して地上的な生活と理想を再び いかにして生きてゆくか、とい では死んだ

彼の力の溢れるばかりの栄光に飾られて鮮や

まわりの空気を犠牲にしてでも、

創造力を強調した。

新らしい主人公は、

強烈なあまり非現実的な、

「新らしい世界観は、

ーマルタ島のユダヤ人」試論

しかし自分の力でそれにうち克たねばならない。

う実践的方法論であった。

自分が生きてゆくというのが最大の目的なのである。途上にはあらゆる危険がある。

バスはそれをエコーするように「自分がいつでも一番自分に親しいもの」(一幕一場一八七行)という。そして「こ カゝ ら彼は、いわゆるマキアヴエリアン「ヴイレンであるのではない。マーロウはマキアヴエリの口を通じて、 評している。 主義の結晶であろう。このトーンこそこの芝居の基調音である。序詞を述べるマキアヴエリはそのシンボルであ うしてわしは生きるぞ、全世界が滅びてしまっても!」(五幕五場一○行)と叫ぶのだ。この一行は何と見事な個人 **うか御引き立てが滅るなんてことがありませぬように」(同三三-五行)。** にバラバスへの同情を求めているのだ。「彼は彼相応に御認め下さい。彼がこの私に似ているからといって、ど .に浮き出したのであった。」マキアヴエリズムの精髄はこの個人主義である。「スペイン悲劇」のロレンゾウは 彼はバラバスを紹介するにあたって「その金も私の手段によらずば手に入れられなかった」(序詞三二行) 「俺は自分を信用するのだ、自分ってものを俺の友にするのだ」(「スペイン悲劇」 三幕二場一八行)。 バラ まだ幕があかぬうちに観客はバラバスがマキアヴエリアンであることを知らされる。 こういって幕がひかれる。

公パラパスの姿が内舞台に見出されるのである。 いるのだ。 発展であった。 ここで日常的な感情のリズムを伝える詩型を作り出すのに成功したのである。それは詩人から劇作家への自然の 驚かされる。 ・P・ウイルソンは訊ねている。だが黄金の山を前に銭勘定にふけるバラバスは何を呟いているのであろうか。 「ふん、何て面倒なこった、こんな片端金を数えるなんて!」(一幕一場七行)。彼は喜ぶどころか不平を鳴らして 「してこれだけであれだけ儲かったって訳だな」(一幕一場一行)。われわれの耳は、まず彼のこの会話的 われわれは黄金の山に眩惑させられるのではない。黄金をまるで小石のように数える彼の態度に驚く 「タンバレイン大帝」のあのアイアンビックの大言壮語からは何と程遠いのであろう。マー 「『マルタ島のユダヤ人』以前に話の途中から始まるイギリスの劇が他にあったろうか?」 とF しかし始めか すると主人 ロウは 口調に

宝の輝きが支配している。 のである。それというのも彼は「小さな部屋に無限の富」(同三七行)を貯えているからだ。「タンバレイン大帝」 「フォースタス博士」は暗い夜の世界であったが、「マルタ島のユダヤ人」では燦然たる財

ド、そして珍奇で滅法高価な宝石類の袋。その値打ときたら、掛値なしに見積って、そのうちの一つが、たったこれだけ の一カラットのものだって、まさかの場合に、捕虜になった王様の身代金になれるのだ。(同二五―三一行) 火のような蛋白石、サファイア、紫水晶、ヒヤシンス、 硬い黄玉、緑のエメラルド、 美しい紅玉、 きらめくダイヤモン

フォ ってわれわれは神の如く不死になることができるのだ」といい(「タンバレイン大帝」 一部一幕二場一九九―二〇〇行)、 ウの主人公達と較べるとき彼の背丈の低さはいかんともし難い。タンバレインは「ジョヴが天を昇った階段を通 つくられている」(一幕二場二二〇行)というとき、誰が彼の言葉を否定しえようか。 しかしバラバスを他のマーロ れにとり憑かれたマーロウ的主人公なのである。彼が自らを「ありきたりの人間よりも、よりすぐれた性質から の如く彼には、拡がり、想像する精神があるのだ。」バラバスはタンバレインやフォースタスと同じく無限への憧 汚い悪徳であることをやめ、無限を憧れる一つの情熱の大きさにまで高まるのだ。」マーロウがここに描き出して な宝石類』の上を徘徊するとき、そして想像のなかで自分の商船の跡を追うとき……貪欲は変形される。それは いる性格は「彼にとっていつもそうであるように、異常な力を求める異常な人間のそれである。」「タンバレイン 「バラバスが」とボアズは述べている、「輝く金貨を数え、恋人の歓喜をもって彼の貴重な宝石、『珍奇で高価 ースタスも「すぐれた魔術師は半ば神である。さ、頭を使え、神の力をうるために」といっているイ「フォース

ルタ島のユダヤ人」試論

「マルタ島のユダヤ人」試論

はない。彼をとり巻く社会が彼にそれを要求しているのだ。それは、 が黄金を望むのはそれが彼の理想であり、「至福」であり、「魂の糧」(二幕一場四八-九行)であるからばかりで 縁ではない。 の名状し難い性質、至高性ともいうべきものが欠けているように感じられるのだ。そのことは彼の性格描写と無 的憧れに思われはしないだろうか。彼の憧れのなかには、他のマーロウの主人公のうちにみられるところの、 の無限への憧れは「小さい部屋」に押し込められているのである。いかにも彼の黄金への欲望は無限への憧れ タス博士」 九〇―一行)。 けれどもバラバスは彼らの如く人間の条件を超えて神の座へと飛翔するのではない。 一つの形である。だが、それを美や知識や権力への、あの心高鳴る渇仰と較べるとき、一オクターヴ低い形而下 彼は、 かくあるべしという理想像よりは、むしろ、かくあるという現実像により近いのである。 あ

言葉がきかぬときは、力がものをいう。しかし黄金はその二者よりも、 ものをいう。(「スペイン悲劇」二幕一場一〇八―

という世界なのである。 芝居の冒頭において彼は運命の絶頂にある。 生きてゆくための戦いにおいて黄金は「兵隊」(一幕二場二〇五行)なのだ。

だ。これこそユダヤ人に約束された祝福だ。そしてここにかのアブラハムの幸福もあったのだ。大地の膓をひき裂き、海 にしてくれるというのだろうか? (一幕一場一〇一一九行) を召使にし、風向きをよくして品物を運ばせ、こんなに懐ろ一杯ほり込んでくれる。これ以上の何を一体天が地上の人間 こんな風にしてわしらの財産は陸から海からやってくる、そしてこんな風にしてわしらはいたるところで金持になれるの

彼は幸 黄金への欲望」(三幕五場三―四行)が彼らをここへ駆り立ててきたのである。 微税令をうけたマルタの総督ファニ きずり落す事件が起るのだ。それはユダヤ人であるが故の呪いであった。つまりトルコの艦隊がマルタ島を訪れ ーズは、 て、一〇年間も未払いになっていた、連盟による貢税の支払いを要求するのである。「世界中を吹きまくる風 福に酔いしれているのである。これはユダヤ人であるが故の恵みであった。 ユダヤ人にそれを押しつけて金の取り立てを計る。ここにバラバスのメイキヤップのもっとも重要な要 だが彼をたちまち絶頂 いからひ

――彼がユダヤ人だということ――がクロウズアップされてくる。いう迄もなくエリザベス朝の人々のユダヤ

孤独を余儀なくさせられているのである。総督はバラバスに、自分達キリスト教徒がお前達ユダヤ人の生活を許 水平面における断絶がある。バラバスと、 離された恐ろしい孤独のうちにいた。この芝居においてはそのような垂直面における断絶はない。だがここには くキリスト教徒でなければ人ではない。 ていた。 であり、嘲笑と嫌悪の的であった。教会が音頭をとって、人々は、古くから金貸しによって繁栄してきたユダヤ 人に対する態度は、 異邦人でありアウトサイダーなのだ。 自然に対し罪を犯しており、キリストを殺した殺人者の子孫であるとして、 「接触がないということほど、 今日の寛容な態度とは非常に異ったものであった。公的には彼らはイギリスから締め出され ユダヤ人は社会の中にいながら、その実、 一般的な嫌悪を助長するものはない。」 彼をめぐる社会とをつなぐコミユニケイションの糸は切れ、 「フォースタス博士」で主人公は、 彼らは「伝説的な奇怪な化物」 神からも、また人間からも切り 社会の外にいる。 非難し続けてきた。まさし 彼らは、 彼もまた

お前があくまで自分を正し お前の財産を没収する

Þ

ルタ島のユダヤ人」

したが為に天罰をうけて税がふりかかったのであり (一幕二場六三—五行)、

とり

わ

け

公共の利益のためには個人が犠牲にならねばならぬからで(同九七―一〇〇行)、

\_

五―六行)。「あいつらの信仰には、悪意と虚偽と度外れの傲慢以外の何の実もありはしない」(一幕一場一一五行)、 れじゃ、あんたは、 病的な深い憂鬱におちいった。バラバスはその相違に鼓舞され、攻撃的な鋭い諷刺を発つのである。 わしの財産を盗もうというんですな? 泥棒があんたの宗教の礎なんですか?」(一幕二場九

である。その意味において彼は受難の悲劇の主人公であり、殉教者であり、ヨブなのだ。 ラバス」(同一八一行)とか呼びかける。しかし力を合わせて彼を助けようとはしない。同国人のなかにあっても の数は少く戦いは容易ではない。 「宗教は沢山の害悪を嫌疑の目から隠しているのだ」(一幕二場二八一―二行)。 キリスト教徒に較べるとユダヤ人 ラバスは「俺一人」 (同一七九行) なのだ。 仲間であるユダヤ人は彼に「優しいバラバス」(同一七〇行)とか、「兄弟のバ 彼はキリスト教徒からユダヤ人の<贖罪のやぎ>として選ばれたの

み、このようなひどい悲しみを自分の目から隠してくれるようにな。というのも、 なバラバスよ、その日を、 るために、あくせく骨折ってきたわけだ。そしてわしには苦しい夜が与えられたのだ。(同一六三—一九九行) エジプトの疫病、天の呪い、大地の不毛、全人類の憎悪を彼らに下したまへ、汝、偉大なる宇宙の原動力よ!……みじめ お前の運命の誕生日を呪い、 これからは永遠の夜を望むがよい。 わしは、ただ空しき月と無駄な時を得 暗黒の雲が身体をとりかこ

スを描いているのである。 われわれは一瞬彼が旧約聖書の荘厳な薄明に包まれるのをみる。ここで作者はあきらかにヨブをふまえてバラバ ヨブはいう、 「わが生まれし日亡びうせよ……その日は暗くなれ……暗闇および死の

い。 は彼に対する共感をかきたてられずにはおられないであろう。だがバラバスはいつまでも悲運を嘆いて は 記」 三―七章)。 フォースタスをとりまいていたあの夜の闇が、 今やうち棄てられたバラバスのまわりに立ちこ 蔭これを取りもどせ、 雲これが上をおおえ……われは苦しき月を得させられ、憂わしき夜をあたえらる」(「ョブ に会わされている方ではないか。彼がキリスト教徒に対して復讐に出るとして、誰が彼を非難できようか。 める。彼は世の中から不当に虐待されているのではないか。彼は罪を犯しているよりは、むしろ自分がひどい目 彼はじっと苦難を耐えようと娘にいう。「辛抱が心を鎮めてくれる」(一幕二場二三九行)。 いかにも「忍耐が いな 観客

「不公平な神」「不幸な星」を呪いつつ彼は、

ユダヤ民族のしるし」(「ヴェニスの商人」一幕三場一一一行)である。

沈むも泳ぐも勝手にしろと追いつめるのなら、わしもひとつ目を醒ましてふるい立とう。(一幕二場二六六―九行) いや、わしは生きるぞ、このわしの人生を厭になったりはしやしない。運命の神がわしをこんな風に海原へ放り出して、

底した策略で対抗する。 とあくまで生きぬく決意を述べるのだ。 「追いつめられれば、とことん策を弄するまで」(同二七二―三行)なのだ。 何と強靱な生命への意欲であろう。 彼はキリスト教徒の策略に対して徹 かくして芝

居は一つの復讐劇として展開してゆくことになる。

#### 変 貌

 $\equiv$ 

外で娘からの合図を待つ彼に、われわれは、一幕の彼とはいささか異った印象を受けはしないだろうか。彼が一 れぬバラバスは、 は彼の財産のみならず邸をも接収して、尼僧院に改めてしまった。折角隠した財産を取りに行こうにも邸には入 復讐はまず彼の失われた財産の奪回に始まる。彼は万一に備えて自分の邸に巨額の富を隠している。だが総督 一計を案じ、一人娘のアビゲイルを尼に仕立てて送り込むのである。ところで、真夜中に邸の

に馴染むものである。彼は、夜陰に乗じて「黒い翼を羽搏いては毒気をまき散らす」かの悲しくも不吉な呪いの 幕で呼び出した夜の闇が、今やすっぽりと彼をおおっている。彼はも早闇に対立する存在ではない。むしろそれ

「烏」(二幕一場一―四行)なのだ。観客はここに一人の復讐者の誕生をみるのである。

彼はもう栄光に包まれた

火の、小さい、 は微かな思い出」(同九―一0行)に過ぎぬ。開幕早々観客の目を眩ませた黄金の輝きは、 ヒアロウではない。しかし彼は依然として「悶え苦しんでいる、哀れなバラバス」(同五行)である。 「兵士の傷痕」(同一〇行)のごとく痛むだけである。 が待ち焦れる彼の上に金袋を雨と降らすからだ。 おぼろな明かりにとって代えられた。かってもっていた黄金の記憶は、老兵バラバスにとっては だが彼の嘆きはたちまち至福と変わる。 今彼が手にしている燭 なぜならアビゲイ 「昔の財産

おお、 お娘よ! わしの娘、 おお黄金よ! わしの黄金、 おお美よ! わしの財産、 おお至福よ! わしの至福よ、わしの魂にとっては力、 (二幕一場四七--五四行) わしの敵には死であるものよ……

讐への道をひた走る。それにともなって彼は除々に、マーロウ的なヒアロウから、 このわしは、 に戻ったわけである。 金満家になった。……総督の家にも劣らぬ豪華な邸を買った」(二幕三場一一四行)。 いわば彼はスタートライン 失」(一幕二場二二七行)に過ぎない。 なる立場においても変化する。 今彼がいともた易く入手した隠匿財産に較べ る と、 失った財産なぞ「僅かの損 の執念でしかない。そして彼はその虜なのだ。こうして彼は内なる精神において変化するだけではない。彼は外 式で結ばれてよいものであろうか。今や彼の黄金への憧れは無限への憧れであることをやめたのだ。それは一つ ―六行)。バラバスにおいて、歓喜は娘と金との二つに等分されている。だが果してかくの如く人間と物質とが等 であろうか。 狂 おしい恋の絶叫にも劣らぬ何という歓喜であろう。けれどもこのバラバスの歓喜のうちに彼の堕落がみられぬ おお、 わしの娘! キリスト教徒と駈落ちだ! 悔辱をそうやすやすと忘れられるレヴイの一族とは違うんだ」(同一八—九行)。彼はまっしぐらに復 シャイロックにおいて、絶望は娘と金との二つに等分されていた。 彼の復讐はその動機において著しく弱くなったといわねばならない。 われわれは彼が再び没落前と同じく富めるのをみる。 おお、キリスト教徒の金!」(「ヴェニスの商人」二幕八場一五 「わしの娘! コンヴエンショナルなステイ しかし「わしはな、 「わしはまた元通り おお、 わしの金

がその顔付は仔羊みたいにあどけなく罪がない。犬と呼ばれりゃ、わが手にキスして、両の肩をばちょいとすくめ、はだ わしらユダヤ人は、嬉しいときにはスパニエル犬みたいに尻尾もふれる。が、歯をむき出したときには咬みつくんだ。だ しの坊さんよろしく頭を下げるやり方を、フローレンスで学んだんだ。 (同二〇一五行

ジ

ヴイレンへと変貌してゆくのである。

「マルタ島のユダヤ人」試論

同時にステイジ フローレンスはいう迄もなくマキアヴエリの本場である。この科白に描かれたユダヤ人は、 ヴイレンとしての姿である。その姿は次の科白でより明隙になってくる。 被圧迫民族であると

わしが鳩よりも蛇の性だということをみせてやろう。つまり馬鹿よりも悪党だっていうことを。(同三六―七行)

残っているであろう。だが、次のイサモアへの科白は彼を全くの加害者へと変えてしまうのである。 二つの方法があることを知らねばならぬ。第一は法により、 れ には獅子とならねばならぬ。」 る。……君主が特に獣の方法をとらねばならぬ場合には、……係蹄を知るためには狐となり、狼を走らせるため は獣に属する。しかし第一の方法だけではしばしば十分でないから、第二の方法に頼らなければならぬことがあ 他人の知慧の裏をかき、信義を守るひとびとについには打ち勝ったことを、教えるのである。……競争するには なんじらを遺すは、羊を狼のなかに入るるが如し。この故に蛇のごとく慧く、鳩のごとく素直なれ」(「マタイ伝」 この二行はバラバスが自分の正体を観客に知らせる、いわば一つの名乗りなのだ。彼はここで聖書の 一〇章一六節)より、 あるのは策略だけである。「君主論」によれば、「現代の経験は、偉業をした君主たちは……奸智によって 「鳩のごとき素直さ」を削除している。 けれども観客の頭にはバラバスの告白にもかかわらず、被害者としての彼の姿が 第二は力による。 人は皆猫を被っている世の中だ。 前者は人間に固有なもので、 単純さは失

わしはといえば、 夜な夜な出歩いては、 壁の下で呻吟いている病人どもの息の根をとめる。ときにゃ、うろつき廻って井

それというのも、 もいた。……わしを相棒だと思いな。どちらも悪党だ。どちらも割礼をうけ、どちらもキリスト教徒嫌いだ。 には、どんなにわしが高利で苦しめたか、切々と書き綴った巻手紙を、 杯にした。年端もゆかぬ父なし児には育児院を建ててやったが、月夜の度にどいつかこいつかを気狂いにした。またとき 高利貸。威したり、騙したり、ふんだくったり、周旋屋にはつきものの手管を使って、一年のうちに、牢屋を破産者で一 やしてやったし、墓を掘ったり、弔いの鐘をついたりで、寺男を年中繁晶させてやったもんだ。その後、 のを見たい量見からよ。若い頃に医学を学んだ。皮切りにイタリヤ人に験してみた。向うじゃ随分葬式で坊主の懐ろを肥 った。フランスとドイツの戦では、チャールズ五世の援助を口実に、権謀術策で、敵も味方もやっつけた。さてその後が また、とき折、 家の露台をぶらつきながら、奴さん達が、手枷をはめられ、わしんとこの玄関先を引き立てられてゆく キリスト教徒の盗人どもをもてなすために、甘んじて少しばっかり懐ろを痛めもする。 胸の上にピンで留め、悲嘆に暮れて首を縊った奴 武器製造屋にな

バ 完全に生まれ変った人間として感じられるのだ。スピヴアックは次の如くいっている。 除々に変化が生ずるのが見られた。しかしこの変貌は量的な変化ではない。それは全く質的な変化である。 ているのであろうか? 去が突然明かるみに出されたのであろうか? れる如く復讐という行為が彼を悪人にしてしまったのであろうか? あるいは今迄闇の中に隠されていた彼の過 全く相容れない。 ラバ ネットが スは別物なのだ。それは全くモラルの範囲では説明のつけようがない。 いうように、 一体、この極端な彼の変貌をどのように解釈すればよいのであろう。「スペイン悲劇」にみら われわれの印象はそのようなものではなかろう。たしかに復讐へ踏み出した彼の上には 自分を悪覚だというこのあからさまな告白は、今迄のシーンのバラバスの自己弁護とは あるいはイサモアへのこけおどしに、ありもせぬ嘘をならべたて 序詞は彼をフロー 「芝居の残りの部分では V ンスの被護

ル

一六

彼の鉤鼻は神秘劇や道徳劇の悪魔を仕立てる顔の小道具と同じものであるが、悪魔ということでも説 明 で き な 下においているが、 のである。」スピヴアックのこの意見はわれわれを悩ます難問題の上に一つの光を投げかけてくれる。右に引い のだ。……換言すればマーロウは、より古いドラマトルギイの通俗的効果に訴えて、バラバスはヴアイスとなる たバラバスの科白からすぐ「タイタス い。彼は性格の変化を蒙るのではなく、もっと根本的なもの――ドラマトルギイの変化、劇的方法の変化を蒙る マキアヴエリアンということでも説明できないし、また彼は屢々悪魔的なものと較べられ、 アンドロニカス」のエアロンの科白が想起されるであろう。彼は「これ

ほどの大悪事をやって、後悔していないのか?」と問われると答えていう。

がよろこんで蠅でも殺すように、千位恐ろしいことをやってきたんだ。 てローマ字で、「われ死すといえども君が愁傷を死なしむなかれ」と刻んだことも屢々あった。くそっ! 死骸を墓から掘りおこし、親しい縁者の門口に立て掛けて、死骸の肌に、まるで樹の肌にでも彫るように、ナイフでもっ へし折ったり、夜にゃ穀物小屋や乾草山に火をつけて、持主共に涙でそいつを消させたり。悲嘆もほとんど忘れた頃に、 てやったり、無実を奴を告訴して偽証をしてみたり、親友同志の仲を裂いて不倶戴天の敵としたり、貧乏人の家畜の首を もっとも呪うような日は、ほんの僅かだろうが。たとえばよ、人を殺したり、殺させたり、若い娘を手籠にしたり、させ 後悔してるよ、もう千位やらなかったことをさ。目ざましい悪事を何一つやらかさなかった日を、今でも呪ってるんだ。 全く、 もう一万位やらかせないのが残念なだけ 俺はまるで人

バラバスとエアロンのこの二つの科白にあらわされた悪事の数々には、復讐とか野心とか貪欲とかいった明確な 動機の裏附けは見当らない。これはまさに「ヴァイスを普遍化し、不滅のものとしている、悪業を述べたてる長

(タイタス

アンドロニカス」五幕一場一二四―四四

い科白」の一つである。だが、スピヴアックの助けにもかかわらず、疑問はなお解けていない。なぜ マ® より古いドラマトルギイに訴えて、バラバスをヴァイスにせねばならなかったのか? われわれは、 ! ₽

あろうか? 私にはこの変貌こそマーロウのモラルであったような気がするのだ。 コンヴエンションがユダヤ人のバラバスに、 ってそれで割り切れるものでもなかろう。 一人の悪党だった。> 一体バラバスがこの変身を経なかったといい切れるであろうか。 現代の悪魔ゲッツは聖者 果して、スピヴアックのいう如く、バラバスの変貌は、 いつまでもヒアロウを許しえないことを認めねばなるまい。 モラルの範囲で全く説明のつけようのないことなので △朝、 眼を醒ますと、

白さよりおれの黒さが好きなんだ。』」バラバスはいう、「キリスト教徒として貧乏を憐れんでもらうより、こう 追放されたユダヤ人であることを、もう一度思い起さねばならない。彼ら異質的不可触民の反応についてサルト **ぅ。」 マーロウはバラバスにこの裏目を賭けさせたのではなかったか。ここでわれわれは、バラバスが社会から** に賭ける、 じながら汚辱のしるしをもちはこぶかわりに、誇りをもってそれを飾り立てるにすぎない。 拒絶するのは、 わたすまいとして、自分がその犠牲者となる貝殼追放を、自らすすんで引受ける。『われわれをうけいれるのを ルは次のようにいっている、 してユダヤ人として嫌われる方がましだ」(一幕一場一一二一三行)。 『汚ねえくろんぼだって! 「おれは罪びとだった。これから人間を変える。おれは上衣を裏がえして、 あなた方じゃない。われわれこそあなた方のところへ入るのを承知しないんだ。』……彼らは、 彼を取り巻く社会は彼に非人間の烙印を焼きつける。宿命を逃れることのできない彼は、 「社会が永久に自分たちをはねつけることがわかると、 ああ! よかろう、おれは汚ねえくろんぼさ、だけどな、おまえさんの皮膚の ユダヤ人として彼には一つの道が許されてい 彼らは、 聖者になることを賭けよ ある 黒人詩人は云 圧制者に主導権を 自らそ

恥

七

マルタ島のユダヤ人」試論

がそれは一つの「倫理的反抗」なのだ。われわれはその底に「自尊心」をみる。あるいはそれをナルシシズムと 手腕はさておき、 を述べたてる、 の宿命にならざるをえない。 から悪覚とされてきた。そうだ、 彼の悪への回心であり、 あの長科白にみられる過去時制の意味とは、このようなものではないだろうか。この悪党宣言こ 芸術的必然となってくる。それはたしかに「高慢で孤独で無効な」「復権請求」であろう。だ 信仰告白であり、 彼は自分に強制される非人間に、 わしは悪党だったのだ。今、わしは悪党になるのだ。> バラバスが自己の悪業 モラルなのだ。 かくて彼の変貌は一つの当為となってくる。その かえってなることを望んだのだ。へわしらは古来

モアとの出会いによって完成させられた。そのイサモアという名前が、そもそも、 ところでバラバスの悪の復権が一つの歴史的な意味をもっていることが注意されるべきである。 聖書によれば、イサモアは、黄金の牛を作って偶像崇拝をすすめた、 かのエアロンの子である。人はここで 歴史的見通しを提供してい 彼の変貌はイ

ついたナルシシストの復讐が、狂暴で向うみずな<悪の復権>であるのも当然であろう。

いってもよいであろう。バラバスは、マーロウの主人公の中でも、

誰にも劣らぬ強烈なナルシシストである。

架につけよ」 バラバスが聖書と深い関連のある名前であることに気づくであろう。バラバスはキリスト処刑のとき、 ストの犠牲によって、 ばれるイエズスのどちらの釈放を望むか」と問うたのに対し、 ラバスを罰したかった。しかし群集は承知しなかった。ピラトが過越節の赦免を使って「バラバスとメシヤと呼 と共に十字架につけられることになっていた盗人、人殺し、暴力の煽動者である。総督ピラトはイエスを許しバ 「彼はもっとも直接的にはバラバスのために死んだのであり、バラバスは、その人のこの世における生が、 とわめいたのである。「もしキリストが全人類のために死んだのであれば」 とレヴインはいう、 もっとも直接的な利益をうけた人間である。 群集は「バラバスを」と叫び、 ……マーロウは本能的に彼に味方して、 「キリストを十字 キリスト 彼の キリ

は共に異教徒だ。イサモアと組んだバラバスの悪事は、一つの反キリスト運動となる。 ユダヤ人を反キリストと同一視しているのだ。」バラバスがユダヤ人であればイサモアはトルコ人である。 二人®

### 笑

劇

兀

のかを考えるとき、 事件と諷刺と笑劇が生ずるのも無理はなかろう。 かくて、 新らしいバラバスは、 の失敗だった」というヘンダァソンの意見は、たしかに当を得てはいる。しかし後の幕のバラバスがいかなるも 偉大過ぎるスケイルで考え、それから後の幕では、バーレスクの気分によって流されるままにしたのが 者、加害者、笑劇、当時の人々がそうであるとしたコンヴエンショナルなユダヤ人となる。「バラバスを始めに た。だが、悪覚へ変貌をとげた今、すなわち三幕四幕では、 そうあるところのもの、性格、 ところで悪覚として誕生したバラバスは一体どのような変化をうけたのであろうか? 古い彼と微妙にオウヴァラップしながら、発展してゆくのである。 ヒアロウ、受難者、被害者、 彼がそうなるところのもの、類型、 悲劇、マーロウが創り出した英雄的ユダヤ人であっ 一幕二幕の彼は、彼が ヴイレン、反逆 ときとし マーロウ

を選ばず、ついに手段そのものを目的となす策略の具体例がみられる。 に送り、二人をライヴァルに仕立てて相討ちをやらすのである。この事件の中には、目的を遂げるためには手段 ドウイック殺害を試みる。そしてそのためにアビゲイルの恋人マサイアスを巻き添えにしてしまう。すなわち彼 して、いよいよ総督への復讐に出る。けれども彼は直接的に総督をやっつけるのではない。まず総督の息子の さて、復讐への第一段階として、アビゲイルを使って隠匿財産の持ち出しに成功したバラバスは、第二段階と ロドウイックとマサイアスの二人に結婚を誓わせ(当時の考えからは重婚)、 偽の挑戦状を夫々

九

- マルタ島のユダヤ人」試論

それから逃れたいという試みをあらわしているのだ。」 しかしアビゲイルのこの改宗は、ユダヤ人バラバスにと 彼女の改宗を皮肉ってはいない。「彼女の改宗は、彼女を取り巻く狭隘な物質的社会の諸種の絆を断ち切って、 頃はまだ一四にもならぬ美しい乙女」(同三七八行)、「シシイアラアの野の一番綺麗な花」(同三七九行)である彼 た。彼はかって自分の邸へ送り込む際に、彼女を尼にして、皆の前で大仰に彼女の改宗を罵ったお芝居を、今度 る。 バラバスが変貌した如く、彼女も「奇妙な変貌」(一幕二場三八一行) をとげるのである。 マーロウは決して 女だけが、悪党どもの中にあって無実なのだ。恋人に死なれた今、彼女は本当にキリスト教の尼になる決心をす っては許すべからざる裏切りである。と同時に悪事の秘密を洩らされて身の危険を招く恐れのあるも の で あっ

たってわしは嘆きはせんぞ。生きていたって一文だって継がせはせん。祝福もしてやらねば、家の敷居も跨がせぬ。わし 何という不幸な日だ! 不実で軽薄で尻軽のアビゲイル奴! だが行くがいい。イサモアよ、これからあれが面汚しをし 何だと、またアビゲイルが尼になったと! 不実な不孝者奴! 何だと、お前はこの父を棄ててしまったのか?……おお

の恨み重なる呪いの下で死ぬがよい。…… (三幕四場一一二九行)

は現実に演じねばならない。

殺人が、かくも軽くみられるひどい時代」(「スペイン悲劇」三幕六場九〇行)である。 かくしてバラバスはイサモアを使ってアビゲイルを始めとする尼を全部毒殺してしまうのだ。まことに「ああ、

リスの倫理的教えの中には根強い復讐への非難があった。」 しかもバラバスは裁きを下す権利を与えられた 公 パララ を皆殺しにするというのは、 復讐だとみなしてもこれはあまりにも「極端な復讐」(三幕三場四五行)である。いや、アビゲイルのみならず尼 も早復讐ではない。そもそもキヤンベルのいうように「シェイクスピア時代のイギ

的復讐者ではなく、 命を守ってゆくための手段であった。彼はブラウンがいう如き「自らの拡大強化と愉しみのためのヴイレン」と えない追いつめられた立場からなされるものであることを強調している。 によって、 て彼の犯す悪事は、 世界において、どの人物も、 どいつもこいつも皆大悪党なのだ。マフッドのいう通り「愛、 出てくる登場人物のうちで、アビゲイルを除いて、誰がバラバスより、よりよい人間であろう。 もたないのである。しかしこのことは彼から観客の共感がすっかり離れてゆくことを意味するのではない。 である。 な復讐と死によって、 とバウァズはいっている。 ラバスには、 れる幽霊 いうよりは、むしろ<自らを守らんがためのヴイレン>なのだ。 娘を除いて一安心したバラバスは、 今度は「二匹の毛虫坊主」 更に彼は後悔することもない。 その社会の偽善に対して<ノウ>といっているのである。更に作者は彼の悪の復権が、そうせざるを フォースタスがその囁きをきく善天使、 後の時代(シェイクスピア以後) 私怨を晴らさんという私的 復讐 者である。その彼が私怨を晴らすのに満足せずに「集団的 彼を取り巻くキリスト教社会への痛烈な諷刺となってくる。マーロウは彼を暴れさせること 眼には眼をという古えの報復の掟を踏み出す」のであるから、 娘の改宗を嘆く彼は、どちらかといえば被害者ではないだろうか? 根本的には、徹底的日和見主義者バラバスより、よりよくはないのだ。」 したがっ われわれは、マクベスの眠りを妨げる悪夢、リチヤード三世に立ち現わ のドラマの大抵のヴイレンよりも、 といった良心の苛責の客観的相関物を、 正義、 (四幕一場二一行)から攻撃されることになる。 誠実、 彼が娘を殺すのも、 それらがすべてその真実性を失った よりよい復讐への理 あきらかに彼の行為は犯 この芝居においては 一つには自らの生 マルタの奴は 一体この芝居に 生由がある」

僧ジヤコモは娘

死に臨んでアビゲイルは、

ナ

それをきいた彼は仲間の僧ジャコモと一緒にバラバスをおどすのである。

ロドウイックとマサイアスの相討ちの一件が父の策略によるものであることを、

ルタ島のユダヤ人」試論

「マルタ島のユダヤ人」試論

その殺害のやり口が手のこんだものである。バラバスは、丁度三幕でロドウイックとマサイアスを相討ちさせた を改宗させた張本人、僧バーナダインは自分の尻尾を握っている。到底バラバスは二人を生かしておけぬ。

二人の僧はたちまち黄金の虜となり、バラバスを奪い合って内輪喧嘩を始める。バラバスは、まず、僧バーナダ ように、今度はこの二人の僧を相討ちさせるのだ。彼は突如、 えたてた挙句、 自分に洗礼を施し、住まわせてくれる僧院に、ごっそり自分の財産を寄贈することを申し出る。 罪滅しに改宗したいといい出して、 自分の富を数

手本がこれだから、わしはユダヤ人のままでいよう。こりゃまあ、何たることだ、坊さんが人殺し?」(同三四 バスとイサモアは共々悪態をつく、「神に仕える坊さんが悪魔になってお互いに殺し合う」(四幕三場三三行)、「お 思い込み杖でうつ。そこで彼はバラバスとイサモアから殺人の罪で告発されて死刑に処せられるのである。 な恰好に杖に寄からせ、戸口に立たす。遅れて招ばれた僧ジャコモは、その姿をみて自分を邪魔しているのだと インを自分の家に呼び寄せ、 イサモアと二人で絞殺した後、その死体をまるでペイコンでも乞うているかのよう

バラ

「トルコ人だって、これ以上のことは、やろうとしてもできっこねえ」(同三七行)。 マーロウの諷刺が

もっとも効いているのはこのシーンであろう。

然として彼が被害者としてみられることを観客に要求しているように思われる。少くとも彼の悪事が、やむおえ うことで終止符をうたれたかと思うのも束の間、バラバスは腹心のイサモアに寝返りをうたれる破目に陥る。 サモアが娼婦ベラミアと彼女のお抱えのピリア・ボーツアに色仕掛でいいくるめられ、バラバスから金を強請る 総督への復讐は、彼の息子の殺害となり、それはアビゲイルの死へと発展し、ついに二人の僧を片附けるとい 「わしほど虐められたユダヤ人がいたろうか?」(四幕五場六〇行)とバラバスは慨嘆する。 ウは依 1

ぬ自己防衛であることを印象づけんと試みているよう である。

脅迫されたバラバスはフランス人の楽師に変装

る当時の偏見を烈しく皮肉っている。 し、彼らの邸に乗り込むと、毒を仕込んだ花束を嗅がせ彼らを殺さんとする。ここでマーロウはユダヤ人に対す

バラバス イサモア こいつは何て野郎だ! 総督だってわしほどの御馳走は食べておらん。(傍白) あのユダヤ人ときたら妙な奴さ。塩漬の蝗とソース漬けの茸を食べて生きているんだ。

イサモア(あいつは割礼をうけてから、一度も綺麗なシャツを着ていない。

バラバス

くそ、ろくでなし!

日に二度は着換えているぞ。〔傍白〕

バラバス イサモア そいつはあの大汗様から贈り物にもらったのだ。〔傍白〕(四幕六場六二―九行) 奴が被っている帽子は、ユダが首を縊ったとき、ニワトコの木の下においといた代物だ。

睡眠薬を飲んで死を装い、誤認した役人達によって城壁の外へ投り出されると、仮死から立ち上ってこういうの だがバラバスとしたことが、毒の効目を間違えて、彼らの死ぬ前に、犯した悪事を密告され、牢へぶちこまれる のである。観客はこれでいよいよ彼の命数も尽きたと感ずる。しかし彼はこのようなことで参りはしない。

だ。

け、家を引き倒し、わしの財産を取り、土地を奪りのだ。総督が奴隷になって、ガリー船を漕ぎながら、死ぬほど鞭うた 力に訴えんとしているトルコの殿下)を入城させてやろう。 わしが手を借して、 奴らの女、 この忌わしい町に復讐してやるぞ。というのも、わしの手管でカリマス(マルタ島に税をとりにきて、結局断わられ、武 子供を殺し、

「マルタ島のユダヤ人」試論れるのを見たいものだ。(五幕一場六二―八行)

を創り出そうという意図があったとすれば、ここにそれが窺えるといえよう。今やバラバスの行く手を妨げる者 いると共に、 は われわれはしばし彼の悪事を忘れてこの烈しい生命力に驚かざるをえない。もしマーロウに「活潑なヴイレン」 ない。 彼は彼の欲するところをなすことによって「活潑なヴイレン、魅力的なヴイレン、 陽気さと活力をもって泡立ちあふれるヴイレン」となりうるのである。だがそれは奇妙な挫折をと 非常に自信に満ちて

## 五 主人公の破滅と史劇への見通し

げるのだ。

下水道を通ってカリマスの兵隊を市内へ導き、 てゆく。今や特定の個人ではなく、マルタという一つの社会に復讐を誓ったバラバスは、 対スペインというこの外なる葛藤と、バラバス対ファニーズという内なる葛藤が、にない合わされ、一本になっ ルコと戦火を交える準備をさせるのだ。トルコの艦隊はマルタの近辺を遊戈している。 スペインの副提督マーチン・デル・ボスコは、 みた。そのため総督はユダヤ人から財産をとりあげたのである。しかるにマルタに客航したスペイン艦の艦長、 われわれは開幕早々、トルコの艦隊がマルタの総督ファニーズに税金を払うか、しからずんば戦うかと迫るのを タの総督に任ぜられた。だが観客が彼からきくのは何であろう? 劇が終局に近ずくと、 今迄背景に退いていたマルタをめぐるトルコ対スペインの葛藤が再び光を浴びてくる。 城門を開かせる。 ファニーズを説き伏せてトルコの要求を蹴り、 7 N タの街は陥ち、バラバスは功によってマル 終幕においては、 カリマスに内通し、 連盟を破って、 トル 地 ŀ

語のロバみたいなものだ。 くんだ。少くとも無益にそれを失ってはならぬ。権力をもっていて、友も得なけりゃ、財布も肥やさぬ奴は、イソップ物 味しなくちゃならん。で、お前は不正によって権力を得たのだから、断乎たる策略によって、立派にそいつを保持してゆ なバラバスよ、 わしは今マルタの総督だ。いかにもそうだ。しかしマルタの人間はわしを嫌っている。嫌われては生命が危い。可哀そう お前の生命が奴らの思いのままならば、一体総督になって何の益がある? いや、バラバス、こいつは吟 (五幕二場二九―四〇行)

の憎悪と軽蔑を避け、彼らが君主に対して満足することによって君主は安全に身を護ることができるのである。 マキアヴエリは教えている、「君主はけっして人の憎悪と悔辱を受けないように努めなくてはならぬ。……人民

高くして眠ることができない。ここで彼は策略によって友と金との二つを得ようといっているが、この二つは次 ある。」今バラバスはその教えとは反対に人民に嫌われ、嘲けられ、生命の危険に曝されているのだ。彼は枕を の科白では一つの等式で結ばれ、 ……君主が陰謀に対して持ち得るもっとも有効な防禦の方法は、人民に憎まれないことと疎んじられないことで

金の方が主格であるとの印象を与える。

わしに儲けさせてくれる奴を友としよう。 (同一一三一四行

彼は一見、 なったファニーズをよんでいう。 開幕のときの、 あの無限の金銭欲にとりつかれた人間に立ち帰ったように見受けられる。彼は捕虜と

総督さん、 トルコの奴がお前さんの国とお前さんとにかけている奴隷の絆を解いてあげたら、 何をわしにくれる?

「マルタ島のユダヤ人」試論

殺してしまえば何をわしにくれる? こういうことをする奴に何をくれる? (同七六一八三行) わしがあんたにカリマスの生命をゆだね、彼の手下に不意打を喰わせ、その兵隊を町の離れ屋に閉じ込めて、 みんな焼き

今バラバスは裏切りを企てて、トルコに売り渡したばかりのマルタを、 けのため、 そのモデルに従ってバラバスの裏切りを描いているのかもしれぬ。けれどもわれわれの印象は、バラバスが金儲 本人、マルタは石をもて彼を迫害した街、この二つに対する復讐が彼の執念ではなかったのか。 二行)というとき、 のである。「こうして、どちらも愛さずに、どちらとも共存してゆこう。わしの策略を利用してな」(同一一一 トルコとキリスト教徒を張り合わせて、漁夫の利を占めんという陰謀に参与していた。あるいはここで作者は、 たと想像され、その中でも、 レット同様、 タを再びファニーズの手に返すというのは、コンヴインシングではない。何故なら、 マキアヴエリ的策略によって、マルタをファニーズに返すというのではない。 復讐を全く忘れ果てたかのようにみえるのである。 彼は完全なマキアヴエリアンにきこえる。けれども彼がただ単に黄金を欲するあまり、 コンスタンチノープルのユダヤ人、パッシイは、トルコの対マルタ政策に加わり、 マーロウのバラバスには、 またファニーズの手に返そうという ファニーズは彼の受難の張 何か外に原因がありそ いくつか原型があっ 彼は五幕のハム

今はとうとうあんたらの総督になった。それがおいそれと忘れられないことをお見せしましよう。なぜなら、逆境にあっ いつぞやあんたがいったように、わしが財を作ったのはこの島のうち、このマルタでだ。この街でずっと成功してきて、

て始めて判る真の友として、わしは手の下しようのないマルタを再建するつもりなんです。……総督さん、わしはあんた

うな疑問が残るのだ。大体、も早バラバスはマキアヴエリアン

ヴイレンではないのだ。

彼に不思議な魅力を与えているものではなかろうか。 点かどうかは別として、 しているのだ。 前の彼と微妙にオウヴァラップすることを先に注意したが、五幕のバラバスは、 あろう。そしてもしこういう表現が許されるならば、この矛盾こそ、夜の闇の神秘の幕にバラバスを包みこみ、 る大工達の毒殺を計り、 いたくもなる。だがバラバスは依然として悪党なのだ。というのも彼は、 ましよう」(同四四行)といって受け取らないのである。一体かの悪党宣言は仮面の告白に過ぎなかったのかと問 っておきなさい。というのは、 これはまた何と人の善いバラバスではないだろうか。彼は総督との取り引きにおいても実に公明正大である。 マルタを返してくれる謝礼金として徴集した金をもってくると、彼はこういう、「いや、まだそいつはと ファニーズが再び取るように促しても、彼は「いや、 総督。 わしがまずあんたの満足のゆくようにし いかにもこれは矛盾である。それが批評家達に欠点と映ずるのも無理はない。しかし、それが欠 われわれは、その矛盾の中に、作者の主人公に対する正当化の試みの姿勢を見るべきで マキアヴエリ的プリンシプルの確認をやっている。 わしが約束を守らなけりゃ、信用しなさんなということなんです」(五幕五場二二 陰謀を企て、カリマスを陥す奈落を作 われわれは変貌を経た後の彼が、 積極的にこの重なり合いを主張 以

くることになっていた。 の策に溺れて死ぬ。 のである。それはコンヴエンションの要求であった。彼は、 このように考えるとき、 7 牛 ルネサンスという季節の産み出した果実、 アヴェリ的策略は、 彼の破滅は新らしい視角から眺め直されねばなるまい。まず彼は悪党なるが故に滅ぶ 天に向って吐いた唾のようなもので、 他のエリザベス朝のマキアヴエリアンと同様、 マキアヴエリズムは、 策略を行う者の頭 ~~ 1 ウはともかく、

ルタ島のユダヤ人」試論

「マルタ島のユダヤ人」試論

ような考え方は」とテイリヤードは述べている、 キアヴエリズムによれば、人間の本性は悪で、無秩序が自然の形であり、文明は単なる方便に過ぎない。 ェ リザベス朝人一般にとって、肯定的よりも、 むしろ否定的価値をもっていたことがいわれている。 「エリザベス朝の人々にとって性に合わないものであった。彼 つまり、

嘆かわしいことにありきたりではあるけれども

なお除外例であるところの規範として、秩序を

考えることを好んだ。」マーロウ彼自身も、マキアヴエリズムの現世主義、 て永続することはできぬ。 は世襲によるか、力で強要されるかで手には入るものだ。屢々そういわれるのをきいたが、暴力的なものは決し も敗北の絶望も知らぬ微温的人生への反逆、といったものに魅力を感じつつ、その限界を意識していたに相違な 作者はマキアヴエリズムのモットーの一つである力への依存についてバラバスにこういわせている。 われらに平和な統治を与え給え」(一幕一場一二九—一三二行)。 個人主義、生への意欲、 しかしマーロウはこの 勝利の歓喜 「王冠

は、 本質的な、 他にあるという気がしてならないのだ。彼が死ぬのは、彼が悪党だからではなく、むしろ、人間の性格の、 どうにもしようのない悲劇的な欠陥のためではなかったか? 私にはそう感じられるのである。

コンヴエンションに全く同調してバラバスを滅しているのではなかろう。私には、どうしても、

彼の没落の真相

にしてみればコンヴエンションの要求を全く無視するわけにはゆかなかったであろう。だから彼は、

コンヴエン

作者

とか結びつけようと努めているように見受けられるのである。 ションの要求と自己の要求――マキアヴエリアン ヴイレンの通俗的没落と性格描写による必然的没落

よりも、友が目的ではなかったのか。彼は自分でも意識せずに、何よりも友を欲しているのではないか。 果してバラバスがトルコを売るのは黄金が目的だったからであろうか?(否、 私の受ける印象は違う。 彼は 彼は自 金

分が「真の友」であることをファニーズに証明することによって、相手がまた自分にそうならざるをえぬように

冒頭の一行「やって来て一緒に暮そう」を連想させる。あの美しいソングでは、そのあとに「恋人におなり」が るのだ。そしてそれは逆上って、かっての彼とイサモアの奇妙な関係を回想させるのである。 きているのを思うとき、バラバスのこの申し出は、突如として、陰微で、湿った、暖かな秘密の匂いを漂よわせ はあんたを釈放する。一緒に暮そう。……さ、握手だ。」 この「一緒に暮そう」は、ただちに「羊飼いの歌」の し向けているのではないか。われわれはもう一度、彼の総督への申し出を想起せねばならぬ。「総督さん、わし

る召使、いや、わしの分身よ。というのも、今、お前以外に希望はなく、その希望の上にわしの幸福が築かれているから ああ、イサモア、こっちへ来い。こっちへ来い、 (三幕四場一三—六行) わしのいとしい者。こっちへ来い、 お前の主人の生命、

バラバスはアビゲイルの裏切りを知ったとき、異常な親しさでイサモアへ呼びかけた。

やろうとさえいっている。 「愛する旦那のためならば何でもやりましよう」(同三八行)というイサモアの答えに、バラバスは自分の遺産を

使うがいい。 おお、頼りになるイサモアよ! わしが死ねば、 (同三九—四三行) わしの持物は皆お前のものだ。そしてわしの生きているうちは、半分使うがよい。わしと同じように 召使ではなくてわしの友人よ!(わしはここにお前をたった一人のわしの跡取りにする)

われわれはこの科白を額面通りに受け取る誤ちを犯してはならない。何故ならバラバスが、この直後、「こ

二九

「マルタ島のユダヤ人」試論

「マルタ島のユダヤ人」試論

場九六一七行)が、 らである。けれども彼はそのためにのみ、イサモアへの愛を告白し、彼を相続人にすると宜言しているのだろう クベスの科白「こんなことが起る一時間前に死んでいたら、俺の生涯は幸福だったのに……」(「マクベス」二幕三 か?(いや、バラバスは、やはり、イサモアを愛し求めているのだ。ダンカン王殺害が発見されたときのあのマ ―一行)といっているのをみると、彼はイサモアを手なずけておくため、 甘言を弄しているのだと解釈されるか うして悪党どもは、 マクベスの演技であると共に彼の本心の発露であるごとく、バラバスは、偽りながら真実を語 どいつもこいつも金の跡をひょこひょこ追っかける。 糠喜びに決っているのにさ」(同五〇

に遺産をやりゃいいんです? 紙を書いてくる、そのことなんです。だって旦那、わしには子がないのを御存知でしよう。それで一体イサモア以外の誰 わしがあいつをわがことのように可愛がっていることをちゃんと知っていながら、 (四幕五場四三―七行) こんなに偉そうな手

っているのだ。だから彼はイサモアが寝返って金を寄越せといってきたことに憤るのである。

あり、 るのだ。彼は、成程、自らのマキアヴエリ的策略によって滅びる。しかし一体何が彼にその策略をとらせたのか これもイサモアの使者、ピリア・ボーツアに対するカムフラージュだけではない。バラバスは真に愛に飢えてい は彼の秘められたる恥辱である。性格の悲劇的弱点である。……彼の憎悪は、誰も愛してくれぬ他所者の虚勢で 「彼は嫌われていることを知っている、そして愛されることを欲している。愛されること――そうだ、その欲望 黄金への欲望ではない。 彼の復讐は、人々に十分嫌われるに足る口実を与えようとする補償の努力なのだ。あわれなバラバスよ、 友への、 恋人としての友への欲求、 愛されたいが故になのだ。 レヴインはいう、

ているわけには行かぬから、 大な高尚な精神によらないで、 られる方がむしろはるかに安全であろう。 埋めることができたであろうか。否、深淵は、ますます広く、深く口を開け、愛の渇きは、ますます募るだけで が彼の本心の無意識の裏返しではなかったろうか。彼の<自尊心><ナルシシズム>の底には<愛されたい>と あわれな老いたる金満家よ!」彼のあの誇り高き見得 人で二つとも兼ねることは難しいから、 皮肉にもマキアヴエリが正に禁じているところのことである。「人に恐れられるよりも愛される方が良いのか により、 れることによってそれを逃れることができよう。だが、何人からも愛されぬバラバスは、 も死んだ。バラバスは全く孤独の牢獄にいるのだ。この捕囚の感覚は何としても克服されねばならぬ。 人の娘」(一幕一場一三五行)のアビゲイルも死んだ。「わしには子がないのを御存知でしよう。」 そしてイサモア したよ、姦通をねえ。けれどもそれも他国のこと、おまけに女は死にました」(四幕六場四二―三行)。「たった一 くも愛されることを欲するのであろうか? いう欲望があるのだ。 かくて彼は、かっての不倶戴天の敵たるファニーズに、乾からびた手を差しのべるのだ。しかしこれは、 愛されるよりも恐れられる方が良いのか。私は両方ともであってほしい、というであろう。しかし同 この孤独から逃れんと試みた。 彼らは背を向ける。だから彼らの言葉をまったく信じて、警戒を怠る君主は破滅する。何となれば偉 いや、 一朝事あるときには役に立たぬ」と「君主論」にはある。 誰からも愛されぬが故の<自尊心>であり、<ナルシシズム>なのだ。 代価を払って買うことのできるような友情は、それだけの値はあるが、手に持っ 両者のうちいずれかをえらばねばならぬとしたら、愛されるよりも恐れ しかし果して残酷な復讐という加虐愛によって、 それは、人間は恩知らずで、……一朝何事かがあってその必要が生じ われわれはその飢えの底に<孤独>をみなければならぬ。 ――「ユダヤ人として嫌われる方がましだ」―― バ 自己をとりまく深淵を かえって嫌われること ラバスがファ 何故彼はか ニーズか 「やりま

ルタ島のユダヤ人」試論

ら得られるのはこのような友情に過ぎぬ。彼を待つのは冷やかな拒否と逆襲である。

(同七〇―一行)。しかし誰一人彼を助けようとする者はない。誰もが自分を助けないことを知ったバラバスは、も 彼はその釜の中で、五衛門よろしく、釜茄の刑に処せられるのだ。「おお、助けてくれ、シーリム(カリマスのこ 切るナイフを、こともあろうに、ファニーズの手に委ねてしまうのだ。この計算違いは、まことに苦いアイロニ カリマスを自分の家へ招き、 彼の部下を僧院へ案内して宴を催おす。 う助けを乞いはしない。彼は再び序幕の威厳を取り戻すのだ。 い。バラバスその人なのだ。卜書によれば彼は「陥し穴に置かれた大釜の中におちる」(五幕五場六三行)とある。 バラバスとファニーズのやりとりで上手をとつて勝利を制するのは後者である。バラバスはトルコ軍の指揮官 僧院を爆破してトルコの軍隊を殲滅させようというわけである。だがバラバスは、陥し床を吊っている索を 助けてくれ、 合図の大砲が鳴り、僧院は爆破され、トルコ軍は全滅する。 しかし奈落に陥るのはカリマスではな キリスト教徒! 総督さん、 どうしてあんた方は皆そんなに無情につっ立ってんです?」 潮時をはからって、 カリマスを奈落に陥

じゃ悪党め、今になっては、わしを助けられぬってことを知るがよい。それから、バラバスよ、お前の末期の運命を吐き出 だってことを知るがよい。わしが奴らを戦わせた挑戦状をでっちあげたんだ。カリマスよ、わしが貴様を打ち倒そうと目 すがよい。そして、猛り狂う責苦のなかで、決然と生命を断つように努めろ。総督よ、貴様の息子を殺したのはこのわし めたわい。死ね、生命よ! わしいキリスト教徒の犬め、トルコの異教徒め!(だが今や度はずれた熱気が、我慢のならん激痛で、わしを締めつけ始 論んだってことを知るがよい。もしわしがこの計略にひっかかりさえしなけりゃ、貴様ら全部をやっつけられたんだ。 忌 飛べ、魂よ! 舌よ、ありったけ呪え、そしてくたばってしまえ! (同七七一八九行)

手をうけようとも、 は、名状し難い一つの認識ともいえる諧謔 に捧げているような哀悼の歌を、 彼はタンバレインやフォースタスの如く、 ヒアロウとして最期をとげるのである。 自分の姿を水鏡に写して、 た さわやかな諧謔 自己を傷つかせまいとするナルシシストの姿勢からであった。バラバスは自己を他者とし、 があるではないか。 自らの死を他人事と傍観しているのだ。<勝手にしやがれ!>と。彼はやはり一人の ここでは歌はない。 経験を通じて一つの悟りに達することはなかった。 ――あのマルタ島をめぐる地中海の空の如く、明かるくも 澄 み 一体その諧謔はどこから生まれたのであろう。 しかしこれはまた何と素晴らしい死に際であろう。 それは、 また作者も、 Ų かなる傷 切っ

思われる。つまり彼はコンヴェンションの保護色に身を隠しているのだ。ある観客には、その保護色しかみえぬ てその忠実な解説者ではなかった。彼はここで観客に、どうなりと、好きなようにとれる解決を与えている風に けだったろうか。 策略は自らの頭上にはね返って自滅する、といった当時の通俗的モラルをうけとったかもしれない。だがそれだ のではなかろう。 的に一ユ く残るところの、来るべき資本主義社会を予見して書いているのだともいえる。しかし作者の意図は、 彩が認められるであろう。 観客はこの結末から、 ダヤ人の生涯 しかしある観客には、 作者に関する限り、 作者と主人公との間の距離にもかかわらず、 (作者はその政治活動を通じて実際のユダヤ人を知っていたらしい)を描くことにあった ユダヤ人は悪党で、 マーロウはこの作品で、金融業は成立するが、民族的人種的偏見は依然として癌の如 その上塗りの底から、 ある程度そのようなモラルの追従者にならざるをえなかったにせよ、 殺人は発覚し、私的復讐には天罰が下され、 自己を頑強に主張している作者のぎらぎらした個性的色 かえってその距離を利用して、 マキアヴエリ 作者は自己 ただ客 アンの 決し 観

タ島のユダヤ人」

偽悪者、 反抗的人間 ――の宿命を語っているのではないか。彼は死にゆくバラバスを嘲笑してはいない。

秘かな愛惜の念を注いでいるのだ。観客にはその意図が見抜けなかったかもしれぬ。だが作者が、 起することに成功したであろうと推測される感情は、決して単純なものではなかったに相違ない。それはファニ 彼らの間に惹

ーズが代弁する次の如きものではなかったろうか? 「俺はこうしてお前の裏切りが報いられるのを 見 た い ん

だ。しかしお前がこんなどじを踏んでくれなきゃよかったのにとも思ってるんだ」(同七四-五行)。

外患は終りを告げた。 売国奴バラバスは死に、敵のトルコ軍は壊滅し、 マルタ島は救われた。ファニーズは捕虜となったカリマスを通して全世界に誇らしく宣言 敵の指揮官カリマスは捕虜となる。 マルタ島を脅やかす内憂

機に陥し入れたりする代りに、必ずや、大海が干上がるほどに塩水を飲まされることになろう。さあ、 全世界があなたを助けにこようとも、今やわれわれは自分達を守ってみせよう、敵はマルタを征服したり、われわれを危 進軍だ。そうして

運命の神、幸運の神にではなく、天の神に、しかるべき讚歌を捧げよう。 (同一一九―一二四行)

この科白は「ジョン王」の結びを連想させる。

手始めに自分を傷つける手助けをしない以上は。諸侯が帰国されたからには、たとえ世界の三隅が攻めてこようとも、き このイギリスは未だかつて傲慢な征服者の足下に横たわったことはなかった、また将来にも必ずやないであろう。自分が われわれは敵軍を敗走させるであろう。何ものもわれわれに臍を噛ませるわけにはゆかぬ。イギリスが自分自身に

対して忠実であるかぎりはだ。

(「ジョン王」五幕七場一一二一八行)

ているのだと非難することも可能であろう。だがそれはまた別の解釈を許すのである。最後にもう一度マルタが バスの復讐とし、 がよくなったというのだ。たとえファーガソン流に、アクションとテーマを分けて、この劇のアクションをバラ それでもフォーテインブラスを、 戦」であった。この芝居はバラバスの死後結び迄の三十数行のうちに、それ迄の悲劇とか笑劇とかのカテゴリイ じ方を納得することもできる。しかしこの芝居の場合はどうだろうか。バラバスの後に生き残るファニーズとは クの国を継ぐ、あの幕切れを私に思わせる。いずれもドラマトルギイが命ずる必然的解決だといえばそれ迄であ ラバスの死によって全く漁夫の利を得ている。これは、フォーテインブラスがハムレットの死によってデンマー をなしとげたともいえる。)しかしこのような芝居の結び方に私は何かひっかかりを感ずるのだ。 られてはいた。(そもそもバラバスの非運の原因はトルコによる税の取り立てではなかったか。)終幕に到るとダブルプロ をはみ出した史劇の様相を俄かに呈している。 の一句は、 ットは結びついて一つになる。(バラバスはトルコをキリスト教徒に売ることによって、いわば、最後にして、最大の復讐 たしかに「ハムレット」もこの芝居も、 「無敵艦隊直後の世界中の敵に対して、 バラバスの上手をゆくマキアヴエリアンではないのか。バラバスが死んで一体どれだけ世の中 テーマをマルタ島を救うこと、としてみても、マルタは内にうみを孕んだまま残ることになる マーロウが、この終幕で、 ハムレットの再生、 これ以外の終り方はできないであろう。 劇的技法とコンヴエンショナルなモラルに頼って、 史劇の様相は、芝居の副筋というか、枠組として、序幕から与え 海に囲まれた岸辺から発するイギリスのびくともし ない挑 復讐否定の教訓、天よりの使者等と考えれば、 「ハムレット」の場合は、 ファニーズはバ

これが「ジョン王」のテーマであり、エリザベス朝人の愛国心の吐露であれば、⑫

「マルタ島のユダヤ人」

タ島のユダヤ人」試論

「マルタ島のユダヤ人」試論

てわれわれの没落を計った奴が、裏切りによってあなた(カリマス) ラバスのお蔭であった。 寄せる期待も空しい」(五幕二場三行)マルタに攻めてきたトルコ軍が、 島」(一幕二場二―四行)を占領し、破竹の勢いで、「軍勢の不足している」(二幕二場三四行)、 を売ったからであった。 よって堅められた、 難攻不落の」(五幕三場六―八行)マルタを占領できたのは、バラバスが売国奴としてマル ファニーズ自身がそれをちゃんと認めている、 けれども、「ローズ島、 サイプラス島、 クリート島、 をわれわれに引き渡してくれたのだ」(五幕 かくもきれいに壊滅させられたのは、バ 「ユダヤ人の親切なんだ。 及びその他地中海に散在する諸 「傲慢なスペインに 裏切りによっ

軍備をととのえ、 彼は義務としてマルタ島を異教徒の手から守らなくてはならない。そのために彼は、ユダヤ人から金を搾取して 五場一〇八一一一〇行)。 コと断乎敵対すべくマルタにすえられた」(二幕二場三二―三行)総督なのだ。 ルタ島に権利をもつ」スペイン王によって「速かに追放」(同三七―八行)されるのが怖かったからにせよ、 バラバスを利用し、目的を達すと、裏切者として斬って捨てるのである。 われわれの目からみればファニーズこそマキアヴエリアンである。 けれども彼は、 たとえ彼がトルコと戦うのも、 こう考えるとき、

のだ。 が自由だとするものを、 いうのではない。歴史は人間が作る。バラバスは彼なりに歴史を作った。ボアズの指摘する通り、「バラバスの仕 える用意はない。 ァニーズは一つの<歴史>の象徴として私には映ってくる。 思いもかけなかった意味で、彼の死後も生きる」のである。しかし彼は自らが作ったその流れに乗れない® 彼の死が、 内なる孤独による自壊作用であるのをわれわれはみた。けれども、そもそもユダヤ人であるバ ただ漠然といえるのは、歴史というものは、 無残に踏みにじって動いてゆくということだけである。 無論今の私には、 人間がこの方が正しいのだ、この方を望む、 歴史とは何か、という大問題に答 無論人間がそれに参与できぬと

に描かれるのは、歴史を変えてゆく人間より、歴史によって流されてゆく人間である。そのとき、輝かしい生命 ろな矛盾を含みつつ流れてゆく。次作には歴史劇「エドワード二世」がきているのも当然であろう。そこで中心 たのではなかったろうか。こう考えるとき、この芝居のフル に、ある秩序に〈所属する〉ことを強制した。それに対して反逆を企てた彼は、 責任を負うべきものではなかったか。 ラバスの疎外それ自体、歴史――それは社会を離れてはありえないので、歴史社会といってもよい――が大くの 上げ潮に乗ったに過ぎない。われわれは歴史のアイロニイを痛ましいほど感ずる。しかし歴史は、 急に重みを増してのしかかってくるのだ。勝利者であるファニーズは、他人の作った流れをうまく利用 人間は逆に歴史によって作られる。 歴史は一つの <掟> としてバラバス タイトル「マルタのお金持のユダヤ人の名高い悲 いわば、 歴史から復讐をうけ いろい

溫〇 M. C. Bradbrook, Elizabethan Tragedy, Cambridge, p. 156

暗い死の影が冷やかに漂ようのである。

の炎はうすれ、

- 2 島のユダヤ人」に関する引用はこの版により、その他の引用はワールズクラシックス版によった。 Cf. H. S. Bennett ed., The Jew of Malta and The Massacre at Paris, Methuen, 1931, pp. 15-17. 以下「マルタ
- © Una Ellis-Fermor, Christopher Marlowe, Methuen, p. 97.
- F. P. Wilson, Marlowe and the Early Shakespeare, Oxford, p. 65.
- (b) Tucker Brooke ed., The Works of Christopher Marlowe, Oxford, p. 232
- (6) Harry Levin, The Overreacher, Harvard, p. 75.

Tucker Brooke ed., op. cit., pp. 232-3

7

- © T. S. Eliot, Selected Essays, Methuen, p. 12
- Bennett ed., op. cit., p. 18.
- M. M. Mahood, Poetry and Humanism, Cape, p. 74
- (ii) Ibid., p. 75.

- Mario Praz, "Machiavelli and the Elizabethans," Proceedings of the British Academy, Vol. XIV (1928), p. 84.

Ibid., p. 55

- F. P. Wilson, op. cit., p. 58.
- F. S. Boas, Shakespeare and his Predecessors, p. 50, quoted from Bennett ed., op. cit., p. 38.

F. P. Wilson, op. cit., p. 61.

- Ibid., pp. 61-2
- Dover Wilson ed., The Merchant of Venice (New Shakespeare), p. xiv
- (19) John Russell Brown ed., The Merchant of Venice (Arden Shakespeare), p. xxxvii.
- マキアヴエリ著、黒田正利訳「君主論」、 岩波文庫、一一二―三頁。

Bennett ed., op. cit., p. 90.

- Bernard Spivack, Shakespeare and the Allegory of Evil, Columbia, p. 348
- Ibid., p. 384
- 24) サルトル著、生島遼一訳「悪魔と神」、 人文書院、 一〇四頁。
- (25) サルトル著、 白井浩司、平井啓之訳「殉教と反抗」一巻、新潮社、六五頁。
- 同頁。
- Levin, op. cit., p. 64,
- Philip Henderson, Christopher Marlowe (Men and Books), Longmans, p. 109.

Mahood, op. cit., p. 80.

- Lyly B. Campbell, "Theories of Revenge in Renaissance England," Modern Philology, Vol. 28 (1930-1), p. 281.
- Ibid. F. T. Bowers, Elizabethan Revenge Tragedy, Peter Smith, p. 107
- Mahood, op. cit., p. 77

Brown ed., op. cit., p. xxxix.

J. C. Maxwell ed., Titus Andronicus (Arden Shakespeare), p. xli.

- Dover Wilson ed., Titus Andronicus (New Shakespeare), p. lxii.
- ⑰ マキアヴェリ著、前掲書、一一七一八頁。
- ® E. M. W. Tillyard, Shakespeare's History Plays, Chatto, p. 21.
- Levin, op. cit., p. 78.
- ⑩ マキアヴエリ著、前掲書、一〇七一八頁。
- Cf. Brown ed., op. cit., p. xlii.
- Dover Wilson ed., King John (New Shakespeare), p. lx.
  Boas, Christopher Marlowe, Oxford, p. 147.
- Boas, Christopher Marlowe, p. 147. Cf. Francis Fergusson, The Idea of a Theatre (Doubleday Anchor Book).